たくみ

CraftSmanship

特集　出雲出西窯展
特集　戦時中発行の月刊「民藝」

第38号

映画「ヒマラヤを越える子供たち」「チベット・チベット」

標題の二つの映画を、さる五月半ば、神奈川のあるインド雑貨店で開かれた自主上映会で観た。

標高五千数百メートルの厳寒のヒマラヤを、チベット民族としての教育を受けるためにネパールやインドに脱出する子供たち。いまチベットでは中国に同化するための教育しか受けられないのである。

ダライラマを頼って、ダラムサラのチベット難民センターの子供村に命がけで向かう子供たちと支援のガイドの青年僧。そこまでして求めるのは、民族としてのアイデンティティである。

もう一つは在日韓国人三世の金森太郎コト金昇竜によるドキュメントである。彼は祖父や父母の被差別体験からくる反日感情が理解できず、日本に帰化することを決め、その前に父祖の地韓国をたずねる。そこではじめて韓国人としての意識に目覚め各地を歩く。

このあと彼は中国に入り、北から南まで探訪の数ヶ月をおくる。そして訪れた香港で、イギリスからの施政権返還の記念すべき当日を迎える。ここまで彼は自らのアイデンティティのいわば証言者として、あらゆる場所でビデオカメラを回しつづけた。

さらに彼、金昇竜は東南アジアで中国におけるチベット問題を知り、また中国人の無知と無関心がかつての自分と日韓の問題に重なることを知る。金はタイから上海に戻り、四川省の成都経由でチベットのラサに入る。

ここからの金のビデオによる証言は、過去のメディアによる実写フィルムも含めて圧倒的である。欧米列強に日本、中国も含め、大国が周辺弱小国を従属させるために如何なることをしてきたのか、心痛む映像である。

民族が命をかけても守りぬくもの。言語、宗教、文化、そして何よりも子供たちの教育である。考えさせられる二つの映画であった。

（志賀直邦）

たくみ特別展

出雲出西窯展

会　期　平成二十年六月二十八日(土)～七月五日(土)
　　六月二十九日(日)は営業いたします。

会　場　銀座たくみ二階ギャラリー
　　営業時間　十一時から十九時まで
　　(日祝日・最終日は十七時半まで)

三彩大鉢(1尺3寸)

出西窯の伝統と新しさ

出雲は斐伊川のほとりにある出西窯は、シュッサイガマとよびます。八岐の大蛇伝説など出雲神話の里、斐川町の農家の次、三男によってはじめられた陶器作りの仕事は、多くの試行を経ながら、河井寛次郎、吉田璋也、バーナード・リーチら民藝運動のリーダーたちのよき指導を受けて今日に至りました。戦後間もない一九四七年の創業ですから、もう六十一年目になります。

出西の器の特徴は何よりも日々の実用に徹していることで、使いやすさがモットーです。また当初は珈琲碗やスープ皿など洋食器には不慣れでしたが、リーチ先生の指導と使い手からのアドバイスによってみるみる上達し、今では洋食器では地方民窯の中でも屈指の人気を誇ります。

出西窯は、初めからの数人に加えてその後多くの仲間が参加し、ギルドといってもいい協働体の仕事として今日に至っています。それだけに作品の種類も多いのですが、やはり六十年余りの歴史が伝統として根付いたのか、その形態にも釉薬にも他の窯にはみられない個性がみられます。たとえば手付のピッチャーや丸土瓶、刷毛目の大小の鉢や型成型による器の数かずなど。

それとともに絶えず新しいものに挑戦し、あるいは作品の改良に努めていることも特筆されます。秋の〝炎のまつり〟も愛好者や若者たちで溢れるほどの人気といいます。

飴釉ピッチャー（特大）

片手スープ碗（白釉、飴釉）

エッグベーカー（飴釉）

丸紋土瓶

手付カップ（白釉、黒釉）

なまこ釉片口（4.5 寸）

たくみ特別展

浜田英峰作陶展

会　期　平成二十年七月二十六日(土)
～三十一日(木)
七月二十七日(日)は営業いたします。

会　場　銀座たくみ二階サロン
営業時間　十一時から十九時まで
(日祝日・最終日は十七時半まで)

浜田英峰作品

島岡先生との出会い

浜田　英峰

島岡達三先生の許で修業を始めたのは、一九九〇年の一月からですが、前年の十一月に初めてお会いしました。

最初、私の年齢が三十四歳なので、五年間の修業には少し遅いことが心配の様子でした。

「若い子なら叱っても、あとでおだてればもとにもどるが」とか「今までの弟子は、皆五キロは痩せたよ」など…。

私も家族を実家に残して覚悟の上なので、そのむねをお伝えすると、「登り窯の窯焚きがあるので薪運びから手伝ってみなさい。」とのことでした。慣れない薪運びでしたが、夢中で手伝いました。

窯焚きにはいってから先生が窯の火を見つめながら、「今から修業すると独立したときは四〇だぞ。」「承知しております。」とお答えしたのですが、黙ったまましばらく窯から出ている火を見つめていました。

その赤く揺らぐ火が映る先生の横顔が、今でも印象に残っています。

翌年の一月から島岡先生の弟子にさせていただいたのですが、その間一度も弟子にするとはおっしゃりませんでした。他の人に私を紹介する時は「私の弟子です」と話していましたが。

弟子になって、まず驚いたのは、当時七十歳を超えていた先生の精力的な仕事ぶりと頭の回転の速さです。そして新しいことに対する取り入れ方の柔軟さ。

「弟子は怒られるのも仕事の内です。」とのことで、よく叱られました。しかし、私の至らない部分を補うよい経験でした。

先生は残念ながら昨年十二月にお亡くなりになりました。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

珈琲碗のこと

瀧田　項一

明治時代東京に登場した喫茶店に可否茶館という名の店があったそうだ。コーヒーは身体に良いと云われたり、毒だと云って嫌われたりして可であるか否であるかと論争の的になったと伝えられ、欧州では「煤のシロップ」とか「古靴のエキス」などとコーヒーがよばれて嫌われた時代もあったと言われている。（コラム天声人語から）

珈琲碗（昭和50年、筆者作）

ともあれ、第二次世界大戦後怒涛の如く押しよせた欧米文化と共に、珈琲店が軒をつらねた。そして、西田佐知子の唄うコーヒールンバと共に更に拡がって、インスタントコーヒーが家庭の中に根差し、街中コーヒールンバの唄声と共に珈琲の香りが漂った。

昔アラブの坊さんが
恋を忘れた哀れな男に
しびれるような琥珀色した
変な飲物を教えてあげました。
たちまち男は若い娘に恋をした：
皆んな陽気に飲んで踊ろう
愛のコーヒー　ルンバーーー

と陽気なリズムは人々の心を浮きたたせたものである。

そして、珈琲茶碗が出回った。デザイナー達が机上であみ出した合理的な、そして無機質なカップが量産され、各地の民窯でも需要に応じて作られた。

珈琲など飲んだことのない老陶工が見様見真似で土を細くより土にした把手を付けて珈琲碗とした。

昭和二十八年来日した、リーチが真っ先に把手の悪さを指摘、滞在していた小鹿田窯に青年陶工を集めて把手づけの講習会を催して以来、陶土を手で引き延ばして付ける欧州の手法が伝播された。

民窯畑の把手はそれぞれ良いが、茶碗を手にした時の指にかかる重さの均衡が問題で、なかなか合格点に達するものは少ない。

次に飲むときの口ざわりである。反り口であれば飲み易いとは限らない。口ざわり、飲みやすさは茶碗の内側の縁によるものである。

器は、人々の掌の中の感触や、茶碗を口にした時の唇の微妙な接触が難しいものである。

これは決して珈琲碗に限ったことではない。（陶芸家・日本民藝館評議員）

戦時中発行の月刊「民藝」(昭和十九年十月号)の記事から

アメリカのB29爆撃機による都会への爆撃もはじめられた一九四四年秋、生産物資の統制、流通の制限などもあって軍需産業以外のもの作りは壊滅に等しかったと思われる。

そういった時に、民藝の窯場や作家の工房、そして日本民藝館はどのような状況であったのか。いまアジアなど海外への安易な生産委託などで、国内の伝統ある職人の技、すぐれた手仕事が急速に失われつつあるが、そういった現状も考え合わせながら、濱田庄司、式場隆三郎の対談「傷兵と陶器」と、先日八十六歳で亡くなられた瀬底恒子さん(元民藝館理事・一九四四年当時は青山学院専門部学生で柳先生のお手伝いをされていた。)の「この頃の民藝館」の二つを紹介したい。

傷兵と陶器

対談　濱田　庄司
　　式場隆三郎

式場　こんど軍事保護院の依嘱で療養所にいる傷痍軍人のための食器を焼くことになったが、これは民藝協会にとっても大きな仕事だし、今後各地の窯を動かしてこの仕事をすすめたいので、いろいろな問題について意見を聞きたい。

濱田　お骨折り有難う。試作も合格していよいよ本決まりになったので、あとは量をこなすばかりになった。経過についてはまとめてくれた君が説明したほうがよくないか。

式場　保護院では民藝を理解され、傷兵にある種の民藝の試作をさせることに賛成されたのだが、それよりはまづ民藝を使わせることから始めたい。それには食器を民藝協会で作ってくれぬか、ということになった。そこで保護院の方々に益子を視察して貰い、君にもいろいろ意見を聞いた上で、たくみも参加して事務的の話がきまったのだった。

濱田　何しろ量が問題だった。いかに益子でもこの時勢に三万組十五万個をおいそれと引き受けられはしない。資材と労力からいっても、困難は伴う。しかし、これは利害を無視し、奉仕してもやらねばならぬ仕事だと思って引き受けた。

式場　試作の写真はこの号の口絵に出したが、上出来でみな喜んだ。これならと保護院でも満足された。鳩居堂で

益子で作られた傷痍軍人用食器（五個一組）

君の個展があったが、あの作品と少しも違いはない。これを療養所で日用できれば大したものだ、とほめられた。

濱田　試作は無理していいものをつくったわけではない。大体私の窯と佐久間君の窯で、第一回の一万五千組を年内にあげる計画をたてて準備をすすめている。

式場　在来普及しているあの硬質陶器に緑の二本筋の入ったものね。あれのもとは英国だそうだね。

濱田　あれは英国のジョンストン製の模倣だ。同じ線をひくにしても、あんな冷たいものでなくてもいいわけだ。東洋には東洋の線がある。一本ひいたにしてもちゃんと日本、支那、朝鮮の感じがでる。こんどの益子での食器は、この点に十分気をつけ、日本的な味の濃い、しかも堅実なものにする。

式場　しかし、強さの点ではどうかね。硬質陶器よりももろくて、破損が多い心配はないか。

濱田　益子の陶器はもろい、という評判が高い。なるほど硬い方ではない。しかし、ねばりはある。硬質陶器は硬そうだが、ひびが入ったらぽこりといく。益子のは少しくらいひびが入ってもなかなか割れない。それに益子は長いこと関東一帯の台所をまかなってきたので、もろくて使えないようなものでは決してない。

濱田　こんどは釉薬でいろいろ補強工作もする。ふちの欠けぬように二重にくすりをかけたりもするつもりだ。だからひどく乱暴に扱わない限り大丈夫だと思う。しかし、これからは使う方でも十分心をくばって貰わねば、駄目だと思うね。今までの食器の扱いは少し乱暴すぎた。

式場　何でも保護院で聞いた話では、硬質陶器でも一ヵ年で全部こわれて終うそうだ。つまり食器の寿命は一年とみて、次の用意をしなければならぬ、といっていた。それは一つは消毒のために、また炊事場の手不足のためにこわれることも多いんだね。そこでこんどは、食器は各自が洗い、保管させよう、そうすれば破損も少くなるし、いい陶器にも親しめるし、という話だった。

濱田　そういう心掛けは有難いね。もっと陶器を可愛がってもらえば寿命はずっとのびるのだよ。君の家庭なんかでも、河井のものや私のものをあんなに日用にどしどし使っているようだが、あまりこわさぬじゃないか。

式場　初めのうちはこわしたね。家族や女中がいいわるいの区別がつかないのではない。これは濱田さんのだ、河井さんのだ、とびくびくしていたからでもあった。そこで私は、こわされても怒らぬことにした。いくらでも補給

式場隆三郎(昭和十二年撮影)

明治31年	新潟県生まれ
大正８年	吉田璋也を介し柳宗悦を知る
大正10年	新潟医学専門学校卒業
昭和７年	「ファン・ホッホの生涯と精神病」刊行
昭和９年	「バーナード・リーチ」刊行
昭和14年	「月刊民藝」創刊
昭和30年	「山下清画集」刊行 山下清ブームおこる

するから安心して使えといってやった。それからというもの、あまりこわれなくなったね。

濱田　そうだろう。食器は親しむと身体の一部のようになって、身についてくるものだよ。君のところでも家庭と陶器がしっくりして来たんだね。こんどの保護院の食器にしても、初めは使い難いかもしれぬ。しかし、やがて慣れて貰えば、今までの冷たい陶器よりはずっと気持ちがよくなると思う。そして傷兵の方々の心をあたためることに役立つに違いない。

式場　その影響は大きいと思うね。中には陶器好きの傷兵もいられるだろうから、……そんな反響が出てきたらつくる方も張合いがあるね。

濱田　いや使い手のことは一々気にはしてはいない。そう神経質にはならぬ。自分の気のすむいいものさえつくっておけば、誰がどうして使ってくれてもいいと思うね。

式場　君の陶器は家にあわなかったら、家の方をあわせるように直してくれという主義だという話だからね。こないだ棟方のところへ行ってね、不動像を刷るのをみたよ。彼は刷り終わると画室に安置してある不動様の厨子に入れて拝み、しばらくむしておいて（彼はそういったよ）「はい、できました。これはもう私のものではありません。不動様のものです。」といって手渡した。作者の手を離れたら、もう自分のものでないというのは棟方のような場合は、少し宗教的な意味が含まれているだろうが、他の作家の場合だってそんな気がするだろうね。

濱田　私もこんどの保護院のものは、窯に入れるとき神官をよんで清めて貰いたいと思っている。

式場　入神式だね。それは賛成だ。

濱田　この仕事は益子ばかりでなく、各地でやって貰いたい。京都地方の療養所のは河井がやり、山陰のは船木や尾野君がやり、青森のは高橋一智君がやるという風にね。そうすれば地方性もでて、全国一律のものでなくなり変化ができるしね。

式場　益子が成功すれば、きっとみな勇んでやるよ。……民藝協会に関係ある個人陶工や民窯の陶工たちも日頃の主張を実現できる絶好の機会だ。

濱田　それに折角技術者指定になっても、焼けずにいる窯を生かすことにもなるしね。陶器が目鼻ついたら、他のものにも及ぼしたいね。

式場　人手のことだが、この仕事に傷兵も参加して貰えれば、職業補導になるね。陶器を志す傷兵もでてくると思うが。

濱田　益子などでもそういう方を幾人かあずかって、教えこんでみたい。佐賀の療養所のように院内に窯をつくって自分たちの使う食器を焼こうとしておられるところでも、まず何ヶ月かはどこかの窯へ入って実地に習わせる法

がよい。折角やる以上は、遊びでなく本格的のものにしなければならない。それにはちゃんとしたところで、正規の勉強をすることが大事だ。

式場　ともかくこんどの益子での仕事は昭和民藝史にも残るし、保護院としても画期的の企てだ。成功を祈るよ。

濱田　大いに努力して、期待に報いるいいものをつくる決心だ。

此の頃の民藝館

瀬底　恒子

木犀の香りに、燃える様な雁来紅の色に、酣なる秋を感ずるこの頃、民藝館は美しい充実した新陳列を致しております。各室をご紹介申上げましょう。

階下広間は白と紺とのコントラストも雄大な大布団地が過去の民衆生活の大きな力と洗練された美的感覚を示し、その下には、千石船華やかなりし頃の船箪笥が場内を所狭しとばかりの迫力を見せて押し並び、美しい欅の杢に又巧みな打ち出し金具に日本箪笥の歴史のクライマックスを示しております。

南の部屋は現在日本民窯地図を掲げて、北は静かな会寧を思わせるような海鼠釉の楢岡窯から南は鮮やかな色美しい壷屋まで、・・・その位置と特性を明らかにし、なおケースには伝統を守って今日なお美しい土瓶、茶碗を作っている諸国民窯の品の数々が並んでおります。隣の部屋は丹波、伊万里、瀬戸等の古作が高雅な落着きを見せて、美の道を語っております。

その他南支那の大胆な筆法の染付、可愛い赤絵小皿、シックな緑釉の壷、燭台、そして素晴らしい赤絵大皿等、隣邦支那の驚くべき強い力と技に打たれましょう。

染織室は外村吉之介、芹沢銈介、柳悦孝の諸先生の作品が新しい染織の在り方を示し、床の間は世界の神秘境チベットの白い厚地フェルトに朱の繡取の敷物が、手前のスリップウェアーの皿と不思議に美しい調和を醸しております。

玄関ホールは、狂言面型、奉納伎楽面、獅子頭が鎌倉室町の文化の味わいを漂わせ、壁面は琉球の紅型、花織が南国の情緒を見せております。さて階段正面には外村先生の十字架を切伏の手法でアプリケした紺と朱の目も覚める様な屏風が周囲を引締めております。

階上は朝鮮の工藝を中心として心惹かれる世界でございます。先ず優雅な絵高麗から渋みのある三島の刷毛目、象嵌、可憐な彩を添える辰砂入の染付、

そして清らかな感覚を持つ李朝白磁、哀愁を帯びた繊細な染付壺、朝鮮の焼物はすべて心を惹かれるものでございます。次いで床の上には白磁大壺を左右に控え、雄勁な凄まじいばかりの鉄釉漬物甕が坐しており、背には朝鮮古版地図がかけられております。

次いで密陀絵（みつだえ）の小壺、華角張箱（かかくばり）に遠く天平文化を偲ばせられましょう。また硯材は上質ではないが形から見て漢硯の姿を伝える、新羅から高麗、李朝の硯の展観もきっと喜んで頂けることでしょう。漆黒の肌を輝かす石の大釜、鍋、薬煎、香炉を見ますと、堅く細工のやり難い石の性質から来る技の上への制限束縛が如何に堕落することより救い、必然的に美の道を歩ませているかを感知します。

ギャラリーは河井、濱田、富本先生方の作品が飾られ、木工室は秋田の樺細工の新作が並び、驚嘆に値するその技術と桜皮の変化に富んだ艶々した美しさを輝かしております。

さて民藝館の大きな使命の新作指導は昨秋に引き続きこの五月にも樺細工の工作伝習をいたし、美しい成果を結びました。また今夏来、岡山花筵の指導に着手して、芹沢、外村、式場先生の御力を頂いて模様の美しい花筵が生まれつつあります。九月末には本館にて花筵について岡山県の山口経済部長、西阿知町の三宅老人と協会の方々が皆様お集まりになって対策を講ずる座談会が開かれました。尚また軍事保護院の方々との会合、その他各種団体の参観がございました。

激しい変動の中にあって、次の文化を創るためにも、また今日の国民生活を充実向上せしめるためにも、あらゆる意味において工藝の分野が益々大使命を帯びていくことを認識し、そのために少しでも貢献いたしたいと存じつつ、民藝館は歩み続けております。

昭和十九年十月七日

平成二十年度

日本民藝夏期学校「会津会場」

会期　七月二十五日（金）～二十七日（日）

会場　三島町生活工芸館
　　福島県三島町諏訪ノ上三九五

費用　二八、〇〇〇円（宿泊費共）

日程

七月二十五日（金）
・会津本郷焼窯見学
・公開講座「民藝論」　水尾比呂志

七月二十六日（土）
・講義「三島町の生活工芸運動」　斉藤　茂樹
・講義「奥会津の手工芸と民具」　佐々木長生
・樹皮細工実演見学

七月二十七日（日）
・福島県立博物館見学
・飯盛山「さざえ堂」見学

詳細は、たくみ
（電話〇三―三五七一―二〇一七）
へお問合わせください。

たくみ歳時記

山葡萄蔓と竹の手提げ籠

里山の植生の豊かなわが国では、昔から自然に自生するさまざまな植物を用いて籠や笊、蓑や笠などを作り、暮らしに役立ててきました。

今でも東北地方ではお年寄りの人たちを中心に手提げ籠や笊などが作られています。

昔はあけび蔓の籠が人気でしたが、近年は山葡萄の蔓を用いた手籠が好まれ、街でもよく見かけます。写真の品は上部に透かしをいれたもの。軽く柔軟さがあって、この手の背負い籠は山村でよく用いられました。新潟の産。

もう一つは竹の手籠です。

竹特有の弾力があって地方の暮らしに重宝されました。岩手二戸の産。

山葡萄手提げ籠（新潟県）
税込み 60、900円

竹手提げ籠（岩手県）
税込み 14、175円

あとがき

七月の環境サミットを待つまでもなく、地球の温暖化と環境破壊の進行は予想をはるかに上回っている。資源と権益の独占を狙う大国の、開発と援助の名での侵攻は、チベットやウィグル自治区での中国の専横をみるまでもなく、強者による弱者の制圧以外の何ものでもない。

だが他方で中国では多数の若者が地震の被災地の救援や、貧困農村での児童教育に献身しているという。その中から必ずや次代の良きリーダーが現れることであろう。日本でもアジアやアフリカの民衆の中で、同様の活動をしている青年たちが数多くいるという。個人の功利に価値を求めない若者の純粋さこそ、未来の地球への最大の宝であろう。

（S）

発行　株式会社たくみ
東京都中央区銀座八－四－二
発行責任者　志賀直邦
電話　〇三－三五七一－二〇一七
FAX　〇三－三五七一－二一六九
振替　〇〇一一〇－二－三五六五九
定価　六〇円（税込）